

京都大学	博士（地域研究）	氏名	遠藤 聡子
論文題目	ブルキナファソにおけるパーニュを用いた女性衣装の特質と成立の背景		
（論文内容の要旨） 本論文は、西アフリカ女性の現代衣装である、工場生産布パーニュを用いた衣装に着目し、その特徴と成立過程、普及を支える社会的基盤を、内陸国ブルキナファソ第二の都市、ボボジュラッソとその周辺の事例から明らかにすることを目的とした。アフリカの衣装にみられる西洋の影響は、アフリカの伝統文化の「喪失」と特徴付けられ、西欧の工業生産品に由来するパーニュもまた、在来の文化を侵略するものとして捉えられてきた。本論では、パーニュを用いた衣装がもつ諸側面を歴史的、社会的に吟味することで、その特質と成立の背景を総合的に捉えることを目指した。 第1章では、先行研究を整理し、西アフリカにおける服地パーニュの普及について、パーニュの起源がインド更紗やジャワ更紗に求めることができ、その模造品の工業生産の成功や、西アフリカ向けの色柄の開発を経て西アフリカに大量導入された歴史的経緯を概観した。また、西アフリカにおける8世紀以降のイスラームの浸透、15世紀以降の西欧商人との通商・通婚などの影響を受けて、今日の衣装の形式が西アフリカ各地で発達した過程についても検討した。 第2章では、ボボジュラッソにおける衣装の変遷と、パーニュを用いた衣装の普及過程を、文献調査および高年の仕立屋への聞き取り調査の結果から明らかにした。フランスによる植民地支配下で領域内の人びとの交流が増加する中で、衣服で着飾る価値観が徐々に広まったほか、独立前後にはパーニュの導入も増え、現在のような衣装の発展の基礎となった。 第3章では、パーニュおよびパーニュを用いた衣装の現在の普及状況、他の衣服や服地との比較によるこれらの特質を、ボボジュラッソ周辺の農村クリニオンにおける女性の所有衣服の全点調査の結果から明らかにした。布やその仕立服の所有が多いクリニオンの女性たちの間で、パーニュは最も多く所有されていた。比較的安価で晴れ着にもできること、他の布にない、色柄の豊富さ、仕立てても着用されること、仕立の形（モデル）の多様さなどによって、女性の間で広く支持されていると考えられた。 第4章では、無数とも評されるパーニュを用いた衣装のモデルの特徴とその社会的意味を、ボボジュラッソにおける衣服のスケッチや定点観測、仕立屋への聞き取り調査から明らかにした。モデルを整理分類すると、その多様性は、骨格となる複数の類型（基本モデル）と、その細部に施される多種多様なカットや装飾によって実現されることがわかった。モデルは西アフリカの他地域などの衣装の形式が伝わったものであり、女性の年代や社会的地位と結びついて着用されていた。一方カットや装飾はファッションの要素が強く、短期間で流行が移り変わっていた。			

第5章では、衣装生産を担う仕立業の営業形態を、仕立屋への聞き取り・観察の結果から明らかにした。他の西アフリカ諸都市と同様、小規模な仕立屋が多く、これらの仕立屋は客の来店を待ち個々に受注する営業形態をとっていた。不特定多数の人に向けた宣伝活動よりも、仕立てた服が人間関係をたどって次の客を引き付けるといふ、人と人とのつながりの中で仕事を増やすことに力を注ぐ傾向がみられた。

第6章では、仕立業の存続を支える徒弟制に関して、独立準備期間における徒弟の生活（生計）を、仕立屋への聞き取りから明らかにした。徒弟は、長期間にわたる実地訓練によって技術を修得し、その間は保護者や親方からの援助に依存するものが多いが、中には親方に隠れて個人で仕事を受ける徒弟もいた。それは生活の糧を得るだけでなく顧客獲得の機会となり、独立後の成功の可能性とつながっていると考えられた。

第7章では、パーニユを用いた衣装の無数のモデルが生まれるしくみを、モデル選択の主な情報源にまつわる人びとの営みという観点から叙述した。衣服を製作する仕立屋や着用者である女性、モデルの写真を流通させる写真商人などの、個人の選択や小規模なビジネスによって、モデルが市内や都市間を循環し、また新しく作り出されることを示した。

第8章では、パーニユを用いた衣装の成立過程と特質、普及を支える社会的基盤について考察した。パーニユを用いた衣装は、西欧の工業製品を用い、在来文化になかった形式に仕立てられ、また、内陸のボボジュラッソでは20世紀半ば以降に普及した歴史の浅い衣装であることをみた。しかし一方で、この地でみられた衣装の形式は、西アフリカ各地で他の文化との融合の中で発達したものであり、服地も西アフリカの人びとの嗜好が反映されてきたことも明らかとなった。

これらの服地と様式は、西アフリカが他の地域と接触する過程で獲得されてきたものである。パーニユを用いた衣装は、これらの服地と様式に、仕立屋が客の個々の要望に対応して施すカットや装飾で無数のモデルを展開し、都市内、諸都市間で日々更新されながら流通し、現在なお西アフリカ独自の衣装として発展している。以上の点から、パーニユを用いた衣装のもつこれらの諸特性は、西アフリカの地域的特性を反映し、またこの地域独自の衣装表現を支えているものであることを明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

西アフリカで女性が日常的に着ている服は、アフリカの「伝統衣」と呼びたくなるような独特なものである。近年、古着が大量に流入し洋服の着用も増えているが、その普及はこのアフリカの衣装には及ばない。何故、西アフリカにこのような衣装が生まれ、好んで装われているのか、その理由を総合的に追究したのが本論文である。

申請者は、西アフリカの内陸国ブルキナファソの第2の都市である、ボボジュラッソとその近郊農村において女性の衣服に関する実態調査を行い、その結果を横糸に、また歴史書に記述されている過去の女性の装いの記録を縦糸にして、ブルキナファソにおける現代の女性の装いの中でパーニュが中心的位置を占めるに至った歴史的経緯と、その発展を支えている諸条件について考察している。

まずブルキナファソ近郊農村における女性の服地の所有状況の調査から、布地あるいはそれをもとに仕立てて作った服が70%以上を占め、西洋式既製服(洋服)は24%に留まることが明らかになった。布地には4種類あり、その中でパーニュと呼ばれる布地が73%と圧倒的に多数を占める。パーニュの他には、ファソダンファニと呼ばれる布地が6%、バザンが6%、セゲンバナが4%であった。

しかし、このように女性たちに広く受け入れられている布地パーニュは、17世紀に西アフリカに伝わったインド更紗の廉価版の布地として19世紀末に当地にもたらされたものであり、西欧諸国のアジアやアフリカ地域の植民地化の過程で展開された、繊維産業の競争的発展の過程と密接な関係があることが明らかになった。工業生産物であるパーニュがアフリカの人々に受容されていく過程は、イスラームの浸透やヨーロッパ人との接触の歴史が関係し地域により一様ではなかった。申請者は、イスラームの浸透も希薄でヨーロッパ人の進出も遅かった西アフリカの内陸部乾燥サバンナ地帯である調査地では、衣服の本格的な普及は20世紀に入ってからのもので、このことが工業生産物であるパーニュが、圧倒的な勢いで拡大する原因になったと考察している。

つぎに申請者は、この布地パーニュの急速な普及を支えている現代的諸条件を、その布地を使って仕立てられる衣装に着目して検討している。最初に、女性たちの仕立て服を作るときに取る行動、すなわち布地の選択、仕立てる服のモデルの選択、仕立屋の選択、仕立屋との交渉の仕方等を、参与観察や定点観測などの結果から詳細に分析した。

その結果、パーニュで仕立てられる衣装は、基本モデルはプラケ、エバゼ、グランメールという3種類と少ないものの、細部に施されているカットや装飾のデザインは多様であることが明らかになった。細部の変化をつけることで、年代や社会的地位と結びついた衣装の着用が可能になるばかりか、短期間に変化するファッションの流行にも対処しうることが指摘されている。ファッションの流行に関しては、仕立屋にある写真カタログが重要な情報源となっており、その写真カタログを売り歩く写真屋

が、街の新しい衣服を撮影するばかりか、セネガルやコートジボワールといった近隣諸国にも出かけており、この地域のファッションが西アフリカ地域全体に広がる繋がりをもっていることが明らかにされている。

こういった多様なデザインの要求に応じてその仕立てを可能にしているのは、街に
いる仕立屋たちである。申請者は次いで、衣装生産を担う仕立業の作業の実態を見る
ため、ボボジュラッソにおいて、仕立屋への参与観察と聴き取り調査を行った。その
結果、ボボジュラッソの仕立屋には小規模なものが多く、注文は個々の来客から取る
ことが多く、彼らは不特定多数の顧客を得ているというより人間関係をたどって新規
の顧客を得る傾向があることが明らかになった。つまり彼らは、人と人とのつながり
の中で仕事を増やしているのである。

このことは、仕立屋における徒弟制のあり方とも関連する。徒弟期間は4～6年にわ
たる長期のもので、その中で徒弟たちは技術を習得するばかりでなく、将来の顧客を
も獲得している実態が明らかになった。そこには「ゴンボ」と呼ばれる、親方に内緒
の内職の形で顧客の仕立てを行い、独立に備えるという慣習が存在するといった興味
深い事実も明らかにされている。

以上のように本論文は、工業製布地であるパーニュが、いかにもアフリカの衣装の
ごとくブルキナファソの女性に受け入れられている歴史的・社会的な経緯を、ボボジ
ュラッソでの長期にわたる現地調査の分析の結果から明らかにしたものである。この
研究はまだ少数の研究しかない西アフリカの服装史研究の先鞭をつけるものである
ばかりか、小規模工業論にも貢献するものである。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものとして認める。ま
た、平成22年2月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合
格と認めた。